

平成22年度 適正利用・エコツーリズム検討会議

第1回エコツーリズム戦略起草部会 議事概要

平成22年12月17日(金) 10:00~12:00

斜里町産業会館 大ホール

1. 開会(司会:ウトロ自然保護官事務所 野川上席自然保護官)

2. あいさつ 環境省釧路自然環境事務所 荒畑企画官

3. 議事

(1) 本日の会議進行とエコツーリズム戦略の策定方法

資料1: エコツーリズム戦略と個別計画の体系(各計画の役割分担と連携)

環境省野川上席自然保護官より、本日の会議進行及びエコツーリズム戦略の作成方法について、資料1により説明。

戦略の内容

- ・戦略の目的(遺産地域及び周辺部の陸域・海域を訪れる全ての利用者を対象とした適正利用とエコツーリズムの基本計画)
- ・遺産地域の自然価値の保護・向上、観光客の自然に基づく良質な体験の促進、地域経済の発展を基本とする。
- ・戦略の構造(エコツーリズム戦略 個別管理計画 実行計画の3層構造)
- ・エコツーリズムに規定することは全体の方針と合意形成の方法。
- ・地域からのボトムアップで作成する。

今日の進め方

- ・今日の目標は、エコツーリズム戦略の項目立ての検討。2班に分かれたワークショップ形式で、項目の洗い出しとキーワードの抽出を行っていく。
- ・相反する意見が出てても今回は構わない。
- ・次回(第2回目)は、有志により今回の意見を整理していく作業をする。
- ・整理後は、第3回目として今回と同様な会議形式で、原案を作成していく。
- ・起草部会の原案は、全体の検討会上げ、より広い方々から意見を伺う。
- ・本日の資料2、3は、あくまで事務局案であり参考資料として扱う。

(2) 戦略の名称変更提案

環境省伊藤課長補佐より戦略の名称変更について提案。

名称変更についての説明

- ・前回の検討会議において、戦略はエコツーリズム利用者のみでなく、遺産地域に立入る全ての人を対象としたため、エコツーリズムに加え、適正利用という観点も必要。
- ・「エコツーリズム戦略」「知床適正利用・エコツーリズム戦略」としたい。

(参加者) 名称変更は構わない。戦略を検討するにあたって、具体的な目標が必要では。今までの検討会議と変わりなく、開催する意味がない。

(事務局) 具体性をつけ、実現できるものを作っていく必要がある。行政に要望しても意見が通らない場合があると思うが、戦略において、地域の合意形成方法等のルールを作り、地域が行政に物を言えるようにしていきたい。

(参加者) 例えばシカの問題であれば、保護するのか、殺すのか、どういう基準で対策をするか決める必要がある。問題が起きてからではだめで、問題が起こる前にどうするかというのが戦略である。利用についても、単なる観光者から

ガイドによる利用まで様々有り、それを一色単にした利用なのか、それとも自然を大事にする管理を主体としていくのか、そこも曖昧である中で、どうやって検討するのか。

(事務局) この戦略で即効性のある対策は出てこないと思うが、対策を円滑に進めるための手助けとなるものを作りたい。ここで話すことが無為なものとは考えていない。

名称については特に意見が無いようであるので、変更したい。

以下ワークショップにより進行

ウトロ自然保護官事務所 中村自然保護官 司会 班

メンバー：中村(司会)、庄子委員、他16名

(司会) 戦略を建てるためのアイデア出しをしたい。戦略は10年ぐらいのスパンを見通しとした計画として考えている。行政が提示する方法もあるが、地域の中で検討し決めていくことで、生きた戦略としていきたい。

(各自自己紹介)

(司会) 戦略としては、基本的な理念として、遺産地域の価値の保護・向上、良質な自然体験の提供、地域の経済振興があり、これを念頭に検討を進めていきたい。

(参加者A) 評価軸とあるが、森、山を守る意識が第一だと思う。その次に動物、人間という順序を確立した中で、利用を決めていく方が一般の利用者にもわかりやすい。

(司会) どこを重要視するか、方向性を決めていくことが重要という意見だと思う。

(参加者B) 自然価値とは何かをまず決めていくということだろう。

(参加者A) どう利用するかということで、もめ事が始まる。動物に関しては、自然よりも愛護が先になっている。動物の管理は、人間が介在した場合、お金が稼げるとなると密猟者がでるなどの問題が生じる。そういったことを考えれば自ずと戦略で決めるべき事がわかる。いろいろな意見を出した場合、どうやってまとめていくのか。実践的なものにならないのでは。

(司会) 骨子で言えば、背景目的の部分で、今の指摘のような重要性を記述していければ、わかりやすいものになるか。

(参加者A) 骨子だけで、以前の計画のおさらいはいらぬ。資料を見ていくとわかりにくくなる。

(司会) 今日配布している資料は使わなくて構わない。検討の為の材料として使って欲しい。

(参加者C) 今日決めることは骨子であり、今の指摘は資料でいえば3. 将来像という項目を残していこうという捉え方となる。骨子の他の項目がないかを検討するというので、この場で課題を解決するのではないという

ことでよいか。

(司会) それでよい。

(参加者 A) どう決めるかということが重要。10年後はどうなるかわからず、10年もかけて検討するのではなく、今起きていることを骨子として検討していけばよい。

(司会) 先程の10年というのは、10年先まで見越してというイメージである。

(参加者 A) 10年先というのは森が豊かで、動物もそこそこ生きられ、利用する人間の経済活動も少し豊かになるという姿以外には無いのでは。そこに行くにはどうしたらよいかということを検討しなければならない。人間は少し我慢をして、動物も多少は殺されても仕方ない。今までの例を見ると、保護地域外では動物は殺されている。動物の命は同じであり、増えすぎる前に処理しても良いのでは。魚の捕獲も同じで、そのようなことは皆で話し合うのではなく、専門家が判断し、我々は部外者として外から判断すればよい。

(参加者 D) いま片付けなければならないことが沢山あるという今の指摘も重要。5年、10年先を見越して、例えば知床岬であれば、こんな漁業が行われ、観光客はこんな姿で歩いていく、番屋はこんな形である、そのような近い未来の夢のような話は皆大きくぶれないのではないか。夢物語ではなく、10年後には必ず目指す姿を皆さんで共有したい。そうすれば細かい違いは調整方法の知恵を出せばよい。その姿の中で、すぐにスタートすべきものは取り組んでいければよい。

(参加者 A) シカに関しても、今まで捕獲できなかったところでも捕獲できるように変わってきた。それはどうしようも無くなってからのことであり、被害が多すぎ、費用もかかる。先を読み、手だてを考えるべき。

(参加者 B) 知床をどうするかという戦略は、複数のシナリオがあって、それを地域の皆さんで決めていくことが必要であると科学委員会において指摘されている。科学委員会でシナリオを予測しながら、地域の皆さんが議論し選んでいくことが、いずれ必要になってくる。この会議では、利用やツーリズムに関して、知床の将来を見た中で、共通目標を持ち、それを目指したアプローチを考えていく。今までの計画はあるが、戦略は紙に書くだけでなく、いかに実現するかということである。利害を超えて、共有する目標を先につくり、それに向かってどうアプローチするかということが戦略で決まり、方向性が決まった個別の計画は動いていくというスタイルになる。

(参加者 A) それはよいが、現実的にはどろどろしたものがああり、理想だけでは解決できない。釣り部会でも、瀬渡しにしてもお客相手であり、なかなか難しい。法律的なものがないと、いいものをつくっても現実的ではなくなる。例えば相泊で民間人が不法になにかしようとしていたところを注意したら、注意の言葉が荒くて袋だたきあったという事例もある。地域というのはそのようなものである。法的な善悪から始まらないと守られていかない。

- (庄子) 皆さんが思っている課題を共有して、方向性を作るのは次回であり、今あることを出していただければよい。
- (参加者 A) 地元の一般の人の何割かは自然にほとんど興味はない。一部の観光事業者の利用方法が問題であり、そういうものを取り除くことが必要。一般の人と現場のイメージは違う。一般の人の方が理想を追いやすい。理想だけで進んではだめである。
- (参加者 E) 今までは大雪でシカが自然淘汰されたが、温暖化になり、また法面の芝の栄養が多すぎて、繁殖能力が高くなっている。一番困るのは立木が冬の間食べられてしまうこと。森が無くなり、高山植物がなくなり、他の植物侵入を招く。シカを駆除とってきたが、何も対策をせず、増えすぎたという現状がある。それをどうにかしないと、自然へのダメージが大きくなる。天敵のクマが食べても、数は知れており、最低限のお金をかけて駆除できる方法を考える必要がある。駆除してもあちこちから集まる可能性があるので、やるのであれば全道一斉でやる必要がある。知床は遺産であり、早めに駆除をして、経費も地形的にかかるため増えすぎないようにするにはどうしたらよいか考える必要がある。ゼロになっても、よそから入ってくるだろう。高山植物は一回途絶えるとどうか。駆除に加え、食材など、付加価値の利用の検討が必要。飼育をした場合、食材として使えるか、毛皮として使えるかという広い視野で見る必要がある。駆除と利用の両立が必要。
- (参加者 D) 今は皆さんの思っている課題を挙げるということによいか。それならば、エコツーリズム戦略という切り口で順番に述べてもらってはどうか。
- ただしそれだと時間がかかりかかり、整理も大変だと思うので、大きな地域の枠の中で、それぞれの立場でどういう状態が望ましいかイメージを述べてもらえばよいのでは。
- (参加者 C) 骨子を決めるのであれば、今までの話は課題の具体的な内容である。骨子の検討は今はやっていない。であれば、それはやめて、具体的な課題事項に入っていけばよい。課題についてキーワード的に挙げるだけで、細かい話をする時間ではないのではないかと。
- (司会) まさにキーワード出しとして課題を挙げてもらえればと思う。
- (参加者 F) 何回か会議に出ているが、わからないことが多い。いろいろな規制をやっているが、法的な規制が現場では重要。それがあれば、ここで決めずとも現場で上手く回っていく。それを決めることが大きな目標では。
- (司会) 海の観点では何かないか。
- (参加者 F) あまり海の話はでてきておらず、今はイメージが湧かない。
- (参加者 C) この骨子で足りないもの、いらぬものはないかと聞いていけば良いのでは。まず骨子はこれでよいかと検討し、次に課題に行ったら良い。課題だけで話が終わってしまう。
- (司会) 課題も骨子に入るものであり、いろいろな意見はここに入ってくるの

ではないかと考えている。

(庄子) 皆さんの意見で漏れがあると、検討が戻ってしまうこともあり、いろいろな意見をいただければと思う。

(参加者 C) 一つだけ挙げるとすれば、規制のやり過ぎがある。10 年間石が落ちていないのに、明日落ちるかもしれないから利用者の安全のために道路を通行止めにするというようなやり過ぎの安全性というのがある。

(参加者 G) 羅臼ビジターセンターであれば、なぜ通れないのかカウンターで説明ができない。デリケートな話で言えば、岬の先端部で原則たき火は禁止と聞いたが、原則とはどこまでを指すかと言われた場合、非常に説明しづらい。そういうことが多すぎる。法律にはあるが罰則規定がないというものもある。法の整備に関わっていないものからすれば、何をどこまで説明していいのかということがある。それらがクリアになった上で、利活用するという形で進みたい。

(参加者 A) たき火の問題は適正利用の時に話題になり、だめとしないとした。そこで曖昧にしたため、こういうことが起きている。きちんと公文書化していくという時代になったのでは。

(参加者 E) 何もがんじがらめにするのではなく、だめとやったことをやらなければよい。やろうとするから反対の意見が出るのであり、それが決まっていれば何も面倒なことはない。

(参加者 G) いろいろなルールがある中で、知床ではこういうアウトドアのやり方が格好いいというブランドができ、それが先端部、海域、羅臼湖でいろいろな場所での楽しみ方ができると良い。また地域の人が、だめなことは格好悪いと言えるような地域づくりをしたい。シカについては、野生生物の管理の話で、これと少しずれるところがある。頭数管理の検討は別で検討することと思うが、シカを目当てに来る人に対して地元がどう対応するかということはこちらの話題になる。シカを見たい人、ヒグマを見たい人に対して、地元がルールなりマナーなりをシンプルに説明できるような体制の整備と地域づくりを 10 年後くらいに目指したいと考えている。10 年では地域住民皆が旅行者、住民間で意見が言い合えるというのは無理かと思うが、その第一段階となればよい。

(参加者 B) エコツーリズム戦略は、一方でブランド戦略とも言える。知床ブランドを傷つけないような利用のあり方はどういうものかを考える必要がある。知床と屋久島はエコツーリズムが確立されているという、すごいイメージを持たれている。知床ブランドを高めていくということは資源価値を高め、利用者の自然観念の満足度を高めていくこと、そういう視点でつくっていくとおもしろい。そうすると沢山来て儲かればよいというのはエコツーリズムではなく、知床を日本、アジアの人たちも引き寄せるにはどういったブランドとしていけばよいか。何となく羅臼は一つのブランドとなっている気がする。

(参加者 A) それにはガイドが重要。ガイドも山岳ガイド、バスガイド等いろいろある。例えばシーカヤックの新谷さんはその技術、人格でお客さん

がいる。利用者は新谷さんのルールで利用する。ガイドの理想、人格が好きなどころにお客さんが行くということで自然を守ることになる。ガイドも自分を磨かなければ、お客さんが来なくなる。ガイドとひとくくりにしないできちんと分けて考えるべき。

(参加者H) 山岳会として一番の課題は、連山の道道の件。世界自然遺産知床になって、調査団に歩いてもらったコースが歩けないというのはどういうことか。一般の人に理解されない。道路管理者の言い分だけきくのであれば、会議する必要はない。

(司会) 以前通っていたところを急に行政的な考えで通行止めになっているということ、また明確な根拠がないということと、行政間の連携がとれていないということか。

(参加者H) いかにしたら、通行できるかということを考えてもらいたい。

(参加者B) 10年先には通れるようにしようというところを合意して、それを達成するためにはどういうアプローチでやっていくかということだと思う。

(参加者H) 当初は工事が終われば、従来通り通れるようになると理解していた。

(司会) ここで決めたブランド価値を高めていくための形を、皆で目指していけるようにすることが大事である。

(参加者A) 山岳会が通してくれといったら、責任を取ってくれば通しますというような体制をとればよい。

(参加者D) カムイワッカ湯の滝も全く同じ状態。昔から落石はあり、落ちるのは当たり前である。確かに銭湯のような状態はとんでもないと思うが、それだけ密にいれば、落石事故の危険も高い。昔のように知る人ぞ知る場所であれば、体験した人がその魅力を伝え、知床ファンを増やしていくことにもなる。それを行政の論理で通行止めにし、さらに一の滝までは良いというのは逆に、がっかり観光地としてマイナスイメージを広めるだけである。

(参加者A) ウトロの観光協会の交渉方法に問題があった。放っておけばうるさくは言われなかった。

(参加者D) 数年前のように芋の子を洗うような状態はやめるべきだが、本当に行きたい人が自己責任で行けるようにする仕組みが必要。

(司会) 自己責任で入れていけるようにということと、カムイワッカの秘境感が重要ということだろう。

(参加者A) 環境省の認定したガイドを連れて行くときは認めればよい。何年もしないと取れないような難しいガイド資格として、その人についてはフリーパスのようにすれば、立入者は限られてくる。誰でも入れてしまうから問題であり、観光協会のやり方がまずかった。きちんと制御できなかった行政もまずかった。それを踏まえて戦略を考えるべき。

(参加者E) ウトロだけでなく羅臼も同じで、行けるところ行けないところを、地元が決めずに行政でやるから行けないところが増えてくる。

- (参加者A) 動力船で言えば、入ってはだめとっていて、一方で調査ならよいという。入ってはだめなのではなく、差別しているだけ。そういうことだといくらいいものを作ってもだめ。
- (参加者C) 全部だめならよい。ルシャに沢山車が入っていて、あれは何かと聞かれる。例外だらけでは説明ができない。
- (参加者A) 穴はいくらでもあり、ルールをつくってもだめ。
- (参加者I) 観光船にお客さんを乗せる中で、何かと聞かれ、やはり説明に困る。漁師さんの番屋の人ではないかと答えるが、数が多すぎる。極論を言えば、ルシャに一日何人か人数を制限して上げられるようになれば、そういう問題も多少は解消される。
- (参加者B) ブランドを守るという目で見えていくと、ルシャにクマを見に来た人が後ろに車があると興ざめということに関して、船の時間が決まっていれば、立入の時間をずらすということも考えられる。
- (参加者I) 近くに漁師が住んでいるため、車があってもおかしくはない。
- (司会) ルシャを利用したらよいというのと、使わないようにという考え方の両方がでた。
- (参加者C) むしろルシャは利用した方がよいと考えている。
- (参加者A) 誰でも山に入れてしまうのではなく、レンジャー、又はガイド等の引率にし、そのためのお金をつけていくということが必要。ただ財団のように一局にお金を集めてしまうと、組織が大きくなり、うまく回らなくなってしまう。
- (司会) 幅広い人たちに監視の目を持ってもらうということか。
- (参加者A) 財団はほとんどのことに関わり合っている。ヒグマが出た際に、財団に連絡が入ってしまうことがあり、本来は役場に連絡するべき。その辺も通達が行き渡っていない課題がある。
- (司会) ルシャでなく、海域の利用の観点からはないか。
- (参加者I) ここで話されている方は保護する気持ちがあり、利用と両立しなければいけないという立場だと思う。自然を息子まで残したいという考えや、お客さんが来てくれなければ食べていけないということがあり、両方を伸ばしていきたいと考えている。ホテルでもお客を増やすためにいろいろと努力をしている。皆が努力をしていかなければならない。五湖の後に船に乗るなどの推奨コースをつくったり、夢話になるが、船を使ってルシャに上れるようにするとか、そういう利用の仕方では小型観光船という窓口を活用してもらいたい。窓口になり、漁師の姿を見てもらったり、地元の関係ない人にガイドしてもらったりして、地元との温度差を縮めていきたい。
- (司会) 次世代に繋げられる環境をつくる必要があるということだと思う。
- (参加者I) そのために何をしていくかは地元で整理できていないので、こういう場所である程度つくり、困ったときに使えるものを作ってもらえると良い。ただあまりに決め事が多すぎると、お客さんが大変になる。気に入ったお客さんが、次の人を連れてきてくれるようなことが必要。

- (司会) エコツーリズムの細かい枠だけでなく、地元も含めてもっと広がった形にしていくということだろう。
- (参加者I) 何かしようとすれば、行政とぶつかってしまう。無理だと思いが斜里と羅臼を繋げて欲しい。誰も何もいわないとそれで終わってしまうので、できないとわかっていても、口に出していわないといけないと感じている。斜里と羅臼で仕事をしているが、峠が通れないと不便。住民も不便であるのに、お客はさらに大変であり、利用が制限されている。各町村のネットワークを繋げる必要がある。
- (参加者E) 前から話しているが、トンネルを造ればよい。
- (参加者A) 例えばアライグマを捕ってきたら点数を与えたり、一頭いくらというような、そういう楽しい張り合いのあるものがないか。自然と外来種の駆除にもなる。予算がないから行かないということにはならない。
- (参加者B) ガイドさんのエコポイントのような形で、ポイントが集まった人は普段入れないところに入れるというのもおもしろい。
- (参加者D) 課題だが、知床のエコツーリズムのブランド価値を高めるという観点と、もう一つは希少な野生生物の保護管理の側面から、知床ならではの野生生物の保護と見せ方を整理する必要がある。例えばシマフクロウは生息地を言っただけではいけないことになっており、見たといったら何で見たんだということになり、これはおかしい。
- (参加者E) 見る方法論をきちんと考えるべき。
- (司会) クマやシマフクロウなど、動物の距離感の考え方の整理が必要。
- (参加者D) 見ても触れてもだめだとしていると、地元で大事にしてもらえず迷惑動物になってしまう。自然公園の中で、生息する動物を見ても触れても行けないというのはおかしい。きちんとしたルールを作った上で夜にシマフクロウを見に行くなどのツアーがあってもよい。
- クマも似たようなところがあり、見るなどと言っても見てしまう。人と頻繁に接触すると問題があるので、観光客が見ていても、追い払わざるを得ない。全てのクマを見てはいけないというのはおかしいと思うが、人慣れを起こしたくないというジレンマがある。例えば岩尾別の河口あたりにいるのであれば、上からならば見て良いとか、ルシャで限定的に見て、生態を学んでもらうとかということも考えられる。全部だめだとなると、カメラマンと対立関係になる。そうなるとクマが出て、情報提供が行われなくなる。ここは追い払うが、こっちで見てくださいというようなことができれば良い。
- (司会) 見方のルールやエリア分けが必要。
- (参加者G) 適正利用・エコツーリズムの題目から言えば、10年後のイメージとしては、クマは知床の大看板のひとつであり、実際に見たくて来る人も多い。そういう中で上手くクマを見せてあげられる知床にしたいと思っている。露出を高めれば良いわけではないが、クマを目当てにきた観光客の期待を裏切りたくない。安心安全に見ることができ、人慣れを起

こさない上手な見せ方を実現したい。また野生動物で言えば、キツネの餌やりはいい加減にやめたい。シカに関しては、見て喜んでいる現実からすれば、シカを減らした場合には見られなくなるということがある。森のためにはよいが観光客がかわいそうかと思う。そこは答えが出ていない。

(参加者A)そこは全面的に反対で、以前はシカが見えなくてたまたま見えるうれしさがあったが今は違う。自然に見える分には良いが、動物を売り物にした観光はしないということが必要。ツアーが入ってくると理想的な見せ方は難しい。

(参加者E)家の周りには出過ぎるくらい出てくる。自然を荒らさないで適正にいれば良いが、増えすぎるから問題がある。

(司会)動物毎の方針は決めていくということが必要かと思う。時間が来たのでここで終わりにしたい。

(参加者A)これを土台にして、具体的に何をするかをきちんときめて欲しい。シカが10頭いたら3頭殺すとか。

(司会)そこまではなかなか難しいと思うが、今日の話を整理していきたい。

ウトロ自然保護官事務所 野川上席自然保護官 司会 班

メンバー(敬称略):野川(司会)敷田委員、他14名

(司会)ワークショップのルールで組織や立場の枠を外してということがあり、まず自己紹介をお願いしたい。

(各自自己紹介)

(司会)資料として整理表を配っているが、戦略の骨子の試案として左側に記載してある。それに対応するような内容が既存でも計画されているが、出来ているところと、進められなかったものがあった。それを進めるために戦略を作っていくことになる。皆さんの活動等の中で戦略にあれば進められると思うこと、課題事項などを挙げていただき、それを踏まえながら、骨子として必要な項目や言葉を考えていきたい。切り口が難しいと思うので、まず既存のエコツーリズム推進計画を検討、試行してきた中での課題などをお聞かせ願いたい。推進実施計画については良く検討されている内容と思うが。

(参加者J)これまでは両町観光協会の事業に冠をつけ、実施していた状態だったが、エコツー推進協として実施内容の絞り込みをして、平成23年からは、ガイド育成・人材育成に取り組むという結論、目標立てを提示した。今は財源の課題が大きい。

(司会)羅臼は豊かな海があり、海の中の価値を利用し、得ていくということがエコツーリズムの好循環に繋がっていくと思うが、人を育成していく場はあるがお金がないということか。

(参加者J)お金が無い中でもいろいろできるが、両町の補助財源が無くなった場合、組織として成り立たない。今の収入は各観光協会に入っている。推

進協として収入が積み重ねていないのが実態。推進協としてはガイド育成に絞り、収入、予算を持ってやっていかなければならない。

(参加者K) エコツアーだけでお金が回っていないということ。参加者が増えて、収入が増え、自然保護や人材育成に回したり、次の費用に回せることが理想だが、全然そういう風になっていない。一つは利用者が少ないということ、PRの仕方が悪いのかもしれないが、同じ知床の中でもっとまとめられることがあると思う。例えば参加者Mさんがやっているようなことも一つの枠組みの中にしていくという可能性もある。そういうことも必要。

(司会) いろいろな活動、事業があるが連携が取れていないということか。

(参加者K) 今エコツアーでやっていることは、どこにも属さないようなことをやっている。

(参加者J) 例えば救命講習会等、推進協が主催した講習会を受けた場合に、受講者に特にメリットがない。

(参加者L) ガイド協議会も推進協に入っているが、ガイド協議会に入っているのは利益追求型の事業者であり、本来素晴らしい講習会などはお金を払ってでも積極的に行かなければならない。自然環境への拠出金に関して、お金を稼いでいるわけであり、コストは自分たちで賄うという考えが一番強く持っている。今、本当にエコツーリズムとマスツーリズムがきちんと分けられているかということ、結局はどちらかということ大方はマスツーリズムに論点を持って行っている。ガイド協議会は民間で補助金はもらえないが、他の方は補助金をどうしようかという場合が圧倒的に多い。まさに官僚政治のようなもので、お金を使わなければならない、だから、こういう講習会をやりますとかいうようなことになる。参加しないというのは、救命であればガイドの中でもやっている。そういうガイドの意見を全く聞かずに、ただガイド育成、教育をと言っており、その言い方だけでも推進協はガイドの上に見下ろしている。ガイド協議会としては推進協の下にある感覚は毛頭無い。ガイド事業者、観光船事業者等、事業者は自然を借りているという意識を持っている。推進協がお金を払っていい企画をしてくれるのならば、参加し、お金を払う。お金は何もなく、ただいい企画をした、お金はお客さんから集めてきて、結局JTBや日本旅行の話になってしまう。

(司会) 組織批判的な話は除いて考えたいと思うが。

(参加者L) 批判ではなく、補助金をもらうとか財源がないというのであれば、払わなければならないのは私達の団体の会員であるということ。

(参加者M) 何回も言うが、環境省でも林野庁でも自然保護をしなければならないだろうが、経済が伴わない自然保護、エコツーリズムはない。我々は営利を目的とする集まりであり、お金がなければ給料も払えない。環境省のエコツーリズムの話は、経済と離れているところがある。営利とかけ離れたシステムを作るのでは進まない。我々のような民間がもっと頭を絞って何とか金を稼いで運営しろというのならばやる。その枠組みを締め付けてしまうとだめ。この前の羅臼のシマフクロウ件でも、動物園で見るのが楽

- しいのか、驚の宿で見るのが楽しいのかということもある。
- (司会) エコツーリズムは自然の見せ方、使い方を考えることである。環境省が考えること、皆さんが考えることもそれぞれあると思う。出来る範囲があり、それを個人の意見だけでなくするということだと思う。
- (参加者M) それは難しい問題ではない。岬の問題で何度も言っているが、おかしいと思うのは環境省はレンジャーもいない、森林管理も誰が木を倒してもわからないような状況である。冬場は自然環境が厳しくて普通の人岬の先端にはいけないことは当然わかっている。せめて夏場には使えるようにならないか。行政は現場のことをどれだけ知っているのか。だめだだめだということだけでなく、地域のいろいろな意見を聞いてほしい。私は先端部のことを言っているが、そういった取り組みを広げて、地域にリードさせれば、我々もやりようがある。それに対して環境省がいろいろ公共のことをやるのであれば、もう少し腹を割って話し合える。そうでなければ20年経っても進まない。
- (司会) 地域の意見を聞いて、行政側は変えなければいけないということだが、地域の意見のまとめかたはどうすればよいか。
- (参加者M) 全員の意見はまとまらない。スタートできることからやればよい。やる気があればやらせようという考えを持たないと、今いる団体と環境省の考えが一致してというのは不可能である。
- (参加者L) 会議の進め方を根本的に変えればよい。今までのエコツアー関連の会議は、例えば環境省が海域、先端、五湖、カムイワッカというような根本を決め、意見の調整の場もなく、第一回目からどさっと資料がすでにできている状態である。そのような場で、協議会の看板を背負って発言することは、利害関係が絡む中で恐ろしくてできない。地元の大半は会議の内容を全く知らない。それは正しい形ではない。まず、地元で意見を聞いて、行政の縦割りをなくして、地域が望むものであれば撤廃しようということであれば、それは素晴らしいこと。まずは地域のそれぞれの立場の要望を出さない限り、毎回同じになる。
- (司会) ガイド協議会、観光協会なりが、要望をまとめてから参加するような下準備が必要ということか。要望が通らない場合はどうか。
- (参加者L) それは民主主義であるから、全部通るわけではない。法律でよい悪いを決めるのは簡単。地域の要望に対して、行政が実現できるようにまじめに取り組んでくれるのなら、地域から話を聞きだしてくれないと進まない。何も変える気はなく、世界遺産地域はこれが法律だからこのとおりやって下さいというのであれば会議の必要がない。
- (参加者N) まさしくその話で、資料2は、今既存のものでこういうものがあるということで、何もたたき台がない中ではやれないだろうということで整理している。環境省、森林管理局それぞれ法はある。法を超えられるかというのはまた別の問題であるが、これまで地域の方々と一緒にやりましようという計画を作ってきたつもりだが実際には動いていない。地域の方々からするとそれぞれのお考えがあり、そこがうまく整理されていない。結果的

に一つの方向性、同じ地域の自然を保護したい、利用したいという考えは一緒なのにその整理がいまいちできていなかった。それをもう一度見直して、さらに10年先までどうしようかと検討しようとしているのがこの会議である。個別の会合は別にあるが、それはいろいろな利害関係があると思う。ここではそれ以前に、世界遺産地域をどうしていきたいかという大きなところがあり、地域も環境省に言われたからということではなく、地域としてルールはこうなればならないというような方向性がある中で、個別のことはまた別があり、考えてこうということ。順番が悪かったかもしれないが、そこは反省しつつ戦略を皆さんと考えていきたい。もっと多くの人の意見を聞かなければならないということであれば、そのことも考える必要がある。

(参加者L) 今までの会議のやり方を批判しているのではなく、普通の会議はそういう形であろうということ。開催者は、皆に内容が伝わっていると考えられる。小さい町で、同じ人がいろいろな組織・立場で重複していることもあり、実際そういったことにはなっていない。

(司会) 会議の仕組みのようなものを戦略に載せるということか。

(参加者L) ちゃんと燃えて話ができるのは、お互いに利益を生めるということで頑張れるか、もしくは補助金がとれるとか、そういう実弾が飛ぶようなものでなければならない。

(参加者L) 無理かもしれないが、半島先端に上陸させるとか船着場をつくるぞというような話が出たときに、その可能性はどうか。ガイド協議会に言えばたくさんの意見が出てくる。これは無理だとか、5年たてばできるとかということがあれば続けられる。

(参加者O) 今までの計画はうまくいかなかった。経済活動を伴わなければ現場は動かない。あるべき姿を決め、問題があった場合にそれをあてはめていくという方法ではなく、例えば岬に行くのはだめという場合に、こういう商売をしたいがそれは知床のエコツーリズムとしてよい、悪いというように具体的なものをつぶしていかないと実行性のある戦略は見えてこない。

(司会) 遺産価値を上げながら、活動できる具体的なアイデアはいろいろでくるということか。

(参加者L) 結論ありきではなく、乗り越えられるかもしれない話だが。

(司会) 法律的にだめなもの、運用的にだめなものがあると思う。いわばグレーゾーンである。それを判断して、できることを増やしていこうということか。

(参加者O) どこまで見せるか、どういった見せ方をするかはいろいろな考え方がある。それを議論すると、知床のエコツーリズムの姿が文章で浮かび上がってくる。その方がわかりやすい。

(司会) 書くこととしては、知床で自然体験するのは、こういうのはいいよという大枠があり、区域などのいろいろなできない制約があるが、それらを判断する皆さんの評価軸がある程度あればよいのでは。

(参加者M) ツアーは楽しくなければ来ない。我々がよいツアーと言っても来る

側が最悪のツアーと感じたらだめ。楽しく、未来に残す価値のあるもの、例えばシマフクロウを旭山で見るのか、餌付けであろうが野生のものを見るのか、それを隠してやりとおすのか、それを知床のひとつの財産として扱うのか。シャチも同じである。陸のものも同じ。だめなものはこちらもわかっている。行政からはこうやれば良いとかいうアドバイスはないのか。岬の事もこうやったらだめだということではなく、こうやればどうにかなるということではなければエコツーリズムは進まない。

(参加者L) 個人一人で戦ってもだめで、こういう場で議論になって、ルールを決め、こういう方向なら良いのでないかといことが目的となるのであれば、先ほどのシマフクロウでも良いから、具体的ものを題材にする必要がある。海域でもいきなりケイマフリと出てきて、だれも見せたいと思っていないものが出てきても困る。最初に興味を示すようなものを出してくれないと話すことがなくなる。

(司会) エコツアー戦略については、行政の提案でなく、住民からの議事提案があって、それに対応して続けることができるというような項目があると上手くいくかもしれない。

(参加者L) 例えば、シマフクロウでも何でも、何か見せるツアーをしたいという時に、専門家の方にそれは生態系に影響があるからだめだとか、大丈夫だといった話を調整しながら、最終的にどうするかといった話し合いの場であればそれはよいと思う。大きい会議では小さい町だから、大半の人たちが何らかの形で参加している。自分達に利害が及ばない話については無関心になってしまう。頼まれなくても皆が出席するような内容でないとなかなか厳しい。五湖の料金の問題の時に協議会で調整をして、会議の流れをみて反対としたのだが、その後全く事情説明がなかった。電話で問い合わせたら、会議の雰囲気を見ていたからとの話だった。あって当然とは思いますが、環境省の会議では何も言わなければ皆話を知っている、納得しているというような感じがある。やってみてわかった部分もあり自分として反省する点もあるが、興味がある内容でないと、なかなか細部まで理解することは難しい。

(参加者O) 今までのいろいろな計画は実際に現場で動いていくときに、これが知床のあるべき姿と文章が沢山書いてあってもほとんど反映されていないという乖離がある。戦略をつくるのであれば、具体的に現場から困っていること、やるべきことの具体的なネタをあげ、管理者でなく使用者側の基準やルールを作ればよいと思う。

(参加者P) 組織を外して発言するが、知床ではこれまで目の前の課題を解決するやり方をしてきたが、それだと、カムイワッカはだめだとかシマフクロウは見てはだめだとか、だめばかりになって、エコツアーといいながら観光客にとって面白くないものになってしまった。それは地域経済の発展になっていないではないかという時に、経済原理を考えてというような大きな方針を立てて、個別の対策を検討していくというやり方を今から考えてみようということになるのではないか。

- (参加者N) 様々な個別課題を検討する時に、その時に元となるものを何も持たえていないと、どうするかということは難しいと思う。そのために戦略という名の地域と行政一緒につくったルールをつくらうということ。個別の課題が戦略にはまってしまうというのも事実。作った戦略が、何か違う問題が起きたときにルールの基準になり、対応ができていく。その時に行政とぶつかる、または法に引っかかるものもでてくることはある。その時にどこまで対応していくかを一緒に考えようということであり、全く否定はしていない。それで皆さんの様々な意見を聞く場を設けているのであり、これだけでは足りないのであればまた別の方法をつくらなければならないと思う。
- (参加者Q) いろいろな方が意見を言ってくれるので違和感はない。エコツアーに関していえば、エコツアーの活動範囲・フィールドは狭いので、そういう方向に向かっていくことだけは決まっているというということ。参加者Mさんや参加者Lさんが話しているように、岬がいいのか悪いのかわからない、ルシャがいいのか悪いのかわからないというように、そういうグレーなものが多すぎて結果的に狭い範囲でのエコツアーの話になっている。それでこういう戦略をつくっても意味がないものになってしまう。現場の実態をもう一度押さえて、それを消化させた上で戦略をつくれればよい。個人的に例えば知床に 100km くらいのトレッキングルートがあってもよいと思うが、それに対する反応にギャップがあり、そういうものが解消されればと思う。
- (参加者R) ライト兄弟が飛行機に乗ったときに、彼らは免許を持っていなかった。今の議論はそんな感じがする。知床に入ってきて、利用して経済活動をするという事実が先にあり、どういうルールでやるかということが決まっていないのでこういう混乱が起こる。これから急いで考えていかなければならないというのは皆さんの共通の認識と思う。私は知床の原生林伐採のころから関わっているが、自分なりに知床の 30 年の変化を見てきて、随分変わっていると思う。ケイマフリの営巣固体数は大きく減っているようなマイナスの変化もある。これは観光開発のやり方が原因の一つでもあるということを考えなければならない。エコツーリズムの理念はよく理解でき、お客さんと呼んで、経済活動をすることは大事だと思う。ただ持続可能な形で利用していくということが基本。口で言うのは簡単だが、皆で何がよいか悪いか協議をし、モニタリングしていくことが大事。経済活動ばかり追うと、リゾート開発時のように目が曇ってしまうことがある。過去の経験を謙虚に学び、今後の作戦に反映させるべき。持続可能な利用の仕方を維持していく上でどのようにしていかなければならないか読み取る力を個人個人がつける必要がある。そういう人が観光利用をしているということが分かれば世界の人に知床の価値が伝わる。
- (司会) 新たな利用をしていく中で、経済中心だと振り返ることがなくなる懸念があり、計画を立てる際に振り返ることのできるようにするということだと思う。
- (参加者O) 基準として持続可能なということが当然あるべきだろうということ。

- (司会)エコマークのようなものを付与してツアー自体の価値の向上にも繋がるものであればよい。
- (参加者J)皆さんの話を聞くと、戦略があって、個別の検討があってというのは逆ではないか。個別事項計画が膨らんで、その都度追加され、誰でも理解できる実態が伴うものだと、皆で共有され、持続可能な戦略になるのではないか。
- (司会)今実際に動いている個別の課題もあるが、壁にぶつかっているものもある。今回の戦略は細かいことは書かず、あるべき姿とそのための方法が書いてあればよい。
- (参加者J)大枠を語るには、個別の事項が残されていないと拡大解釈されてくる。
- (敷田)会議に出てくる人は不幸せな顔をして出てきている。発言してもどうなるのか、発言するところがないから好きな事を言わせてもらおうという感じがある。そうではなく発言したことをきちんと聞いてくれ、答えを出してくれ、やっていいときはやれるような場ではないと意味がない。戦略を作ることは重要だが、そこで決めたことをできるようにする、だめなことはやらないことが大切。環境省や林野庁はその判断を提供する立場で決める立場ではない。そういう場が作られるのであれば戦略はあってもいい。またそういう場を1箇所にし、そこでとにかく決め、個別のことは別で決めてもよいが、全体できちんと了解を取るという整理でよいと思う。座長をやっていて、決めたことが本当にできるのか、法的な確認が必要というのは非常に疑問がある。事務局としてそういう場をつくるのが戦略の一部だとはっきり言えるならば、皆さんやる気になるのでは。
- (参加者L)昔は問題にならなかったようなことが、人が大勢行くことによって問題になってきた。自分たちの持っている、やろうとしていることを明かして、行政に出して、結果だめですよというような自分の首を絞めることになるのではということが怖い。皆さんの腹の内を知りたい。
- (敷田)個別に相談して、通ったらやれる、相談の仕方が悪くてだめだといわれたらやれないという不公平よりも、堂々と言ってやれるとした方が商売としてフェアだと思う。
- (参加者L)法律違反しているわけではなく、皆グレーゾーンでやっているところをどうするか。
- (参加者K)監視体制がない中では、グレーのところは知らない人は行けてしまい、良識のある人は行けないという変なジレンマが生じる。
- (司会)正直者が馬鹿をみるということ。グレーゾーンを明らかにする仕方が話し合える場をつくれればよいということ。考え付いた人のところに人が集まり、法律も確認しつつ議論をし、ルールを作る。そして全体の会合の中で確認を取るというシステムができるとよい。
- (敷田)そういう場にするという事務局の決断は必要。戦略とセットでそういう権限を与えると保障しないと、戦略がただ増えるだけ。
- (参加者M)ある程度段階的なものも必要。いっぺんに皆がよいということには

中々ならない。各組織などに何をやりたいかを聞き、それに対して取り組んでいったほうが早い。知床岬もルールを作り、年に100人が50人かを吟味して限定して上陸させれば、最高の評価を得られる。行った人が評価をしなかったらよいエコツアーではない。やりたいものから順番に検討し、やらせてみるというのも一つの方法である。そうでなければいつまでも進めない。

(敷田)そういうことも含めて、全部意見を出してくれ、そういう相談をする場が欲しいということだろう。

(参加者M)具体的に文章で書くと、さもという部分がある。こんな冊子を持ってきてだれが読むのか。大義名分だけでなく、現実的なことをやっていくべき。観光客は減っている訳であり、検討している間に、事業者が倒れ間に合わなくなる。未来に誇りあるふるさとをと書いているが、今のままでは将来は明るくない。

(参加者L)ルールをつくるために、私たちは協議会を作っている。徒党を組んで金儲けする団体ではない。例えば流氷のルールを作っていたりする。これは一つの作戦で、いい人になるうというのではなく、自分達でルールを作るので市民権を与えて欲しいということ。何年もやっているうちに、保安庁も参加してくれるようになった。例えばカムイワッカであれば、自分たちで自主ルールをつくって、こういうのはどうかというのは実はグレーゾーンのところになる。最初から実現性の無いものは話には乗りづらい。出来るのならば、使わせてもらっているのだから、見合うべきルールは必要と考えているし、利用者負担もする。そういうことならば乗りやすい。

(参加者K)羅臼の遊漁船部会は、適正利用の早い段階で、危機感を感じて自主ルールを作成した。結果それがそのまま利用の心得に載っている。

(司会)推進協の冬季五湖利用も同じ。

(参加者K)マスツーリズムは進行しやすい。縛りを検討するべきだとは思いますが、魅力の打ち出しも必要。認証という方法もある。戦略では、だめという記述でなく、これは積極的に利用してくださいということも必要。

(敷田)そういうことはあってよい。インパクトが少ないタイプに変えたら、深いところまで利用してよいと方針に書かれてもよい。

(司会)国立公園は保護と利用があり、多くの人ができる整備もできる。

(敷田)事業者には悪いが、事業者には平等ではないと書けばよい。きちんと考えているところは優先すると戦略に書いてよい。

(司会)ルール作りができたところにはインセンティブが生まれる。

(敷田)法律は平等に作っているなので、誰でも同じ扱いにしなければならない。戦略はその必要はない。まじめな人、熱心にルールを作った人にはいろいろな許可を与えるということはやってよいと思う。戦略に書いていないとあの人だけ上手くやったというようなことになる。それを戦略に誰でもわかる文章に書けば文句を言われる筋合いはない。

(司会)そういう事が個別に集まってきて、統合されていくという形になるかと思う。当然ルールにはそれをどうやって検証するかということも入れる。

実際そこに行く人というのはその自然を使う人なので、そういう人がルールを作り、モニタリングも行いと完結できる方法をつくるのがベストだと思う。

(敷田) 利用・活用する者が管理するのが効果的。使っている人がいつも見ている訳であり、その人たちが一番よくわかっていて、価値が下がってくればお客さんも減ってしまうのはわかっている。

(参加者R) それも良いと思うが、科学委員会などがある中で、そういうものと連携して出来ないか。

(敷田) 科学委員会の全体の会議には参加しているが、利用の専門家はまだ少ない状況であるのでもっと増やしてもらおうということもある。貴重な生物だけでなく、使っている場所の調査についても、自然科学の先生にも広く興味を持ってもらうことも必要。

(参加者L) 自分たちでルールを作り、自分たちのことを厳しく律している。逆に言えば、ガイド協議会の会員がおかしなことをしていれば、正式にクレームとして言ってもらいたいくらいである。そういうために協議会がある。ただそういう風に現況はなっていない。

(参加者K) 岬については、グレーの部分も触れながら方針は書いている。ただ現実とはあっていない。そういう面で、実際に利用している人にルールを作ってもらった方がより現実的になる。

(司会) 時間なので意見をまとめたい。意見としては

- ・やる気があるところ、できるところは進めやすい
- ・利用している側からの議事提案型の場を作る
- ・判断の価値基準を設けることが必要
- ・個別事項を積み上げて、反映させることもできる
- ・戦略は平等でなくて良く、ルールを作った人が優先できる
- ・ルールを作った人はモニタリング、検証でき、それを科学委員会に上げるということで客観的に見ながら評価していく
- ・マストツーリズムに関しては、その売り方に着目し、認証を与え、違いを見せるというアイデアもある

次回はまとめる作業を行うことを案内する。是非参加いただければと思う。

4. 閉会

環境省野川上席自然保護官より閉会の挨拶。

時間になったので、ワークショップを終了し、委員の方に意見を伺いたい。

(庄子委員) いろいろな規制が多く、お客さんに見せる部分がもう少しあったほうが良いのではないかという意見があった。法律や行政とやりあう場合の、考える指針として出来て行ければよいのではと感じた。

(敷田委員) 今の庄子先生の話とペアになるが、戦略ができれば、戦略により、ものを決めていく場が必要と感じた。座長として協議会を運営させていたでいるが、そこで中々ものを決められないジレンマを感じており、い

ろいろやってみたいときに相談でき、決まったことが出来るということが保障されている場が必要だと思う。それを決める時に頼りになるルールがあればよいと思う。

(野川)今日はこれで終わりとなり、議事録を起こした後に、今日の話をもとめる作業を設けたい。12月は難しいと思うので1月に世界遺産センターで実施を考えている。また日程などご案内をしたい。その次に今日のような場を1月の後半あたりに設けたい。そこでまとめた内容を適正利用・エコツアーリズム検討会議にかけて話し合いをしていきたい。

以上